

「腰部の疼痛」を主訴とするもののうち、原因が明らかでなく、神経学的変化がみられず、X線でも明らかな器質的变化がみられないものを「腰痛症」と総称する。器質的变化がみられるものまで含めるとその罹患頻度は高く、自然緩解するものから、日常生活活動や就労に支障を来す場合など、重症度も様々である。腰痛症の治療は、外科的治療、薬物療法、理学療法、生活指導など種々のものが症状により適用され、臨床での取り組みが進んでいる。

本特集では、「腰痛症」を、形態進化学・医学・理学療法学・装具学などの側面から整理する。

■直立二足歩行と腰痛症—抗重力姿勢の影響（権田絵里論文）

ヒトは直立二足歩行する唯一の動物である。この特異な移動様式は進化の歴史の中でわれわれに多大なる恩恵をもたらしたが、同時に個々人の身体に様々な苦難を科している。腰痛はその最たる苦難の1つである。本稿では人類進化の道のりを辿りながら、直立二足歩行を可能とする抗重力性に特化した身体構造上の問題を指摘し、人類と腰痛との永きにわたる関わり合いについて考える。

■腰痛症に対する診断・医学的治療の変遷（関口美穂、他論文）

根拠に基づいた医療であるEBM（evidence-based medicine）が導入され、腰痛の病態に対する新しい概念を総評し、それに伴う新しい腰痛治療の診療体制を構築することが求められている。診断においては、腰痛を形態・機能障害と捉えることが重要である。治療の目標は、鎮痛治療に加え、指導や励ましの介入により、生活上の障害を改善させるという視点で主観的満足度を求める。これには、EBMとNBM（narrative based medicine）の両立が不可欠である。

■腰痛症者の理学療法評価の臨床的思考過程（伊藤俊一、他論文）

腰痛症に対する理学療法評価の一般的な項目とその解説に加え、問診・各種測定と動作観察などにおけるポイントを述べ、治療選択までの過程を概説した。理学療法を行うことによって、疼痛を軽減・除去するだけでなく、対象者を行動変容へと導き、最終的には再発を予防して対象者のQOL向上につなげることが目標となる。

■腰痛症に対する運動療法と生活指導（川瀬真史論文）

腰痛症に対する身体的評価に加え、問診は腰痛の再発防止の意味からも重要である。腰痛症に対する運動療法や生活指導は医療現場にとどまらず、家庭や職場などの生活の場で施行され継続して行われるものである。本稿では、一般的な腰痛体操について留意点と習慣付けのポイントを説明する。また、日常生活指導に対する教育的アプローチについて臨床データを含め紹介する。対象者の腰痛症に対する認識を深め、対象者自身がいかにセルフケアを行うかがキーポイントとなる。

■腰痛症に対する物理療法と装具療法（森井和枝、他論文）

腰痛症に対する補助的治療手段として、物理療法や装具療法が処方される。腰痛の発生原因を想定し、治療方法を選択していく必要がある。本稿では文献的な報告もふまえ、その適応と有効性について検討した。物理療法や装具療法は、腰痛の軽減や運動療法などの治療効果を高め、持続させる役割を担っている。腰痛症の原因を腰部局所の問題として捉えるのではなく、運動連鎖に関連した全身的な症状としてアプローチしていくことが重要である。